漫才のDENDO全国ツアー

生のお笑い届け続け100回

主宰のカウス「一回一回が全力投球」

中田カウス（74）が主宰し、所属する吉本興業の人気漫才師を率いて全国を巡る「漫才のDENDO全国ツアー」が、30日の大阪公演で100回目を迎える。生の漫才に触れる機会を全国で提供してきたツアー。カウスは「芸人の仕事場である漫才劇場を全都道府県に作るのが一番の夢」と語る。

「漫才のDENDO」は元々、朝日放送で2012～13年に放送された演芸番組のタイトル。しゃべくり漫才の祖とされる横山エンタツ・花菱アチャコや、「上方漫才の至宝」と称された夢路いとし・喜味こいし、カウスの師匠である中田ダイマル・ラケットらの足跡をたどる番組で、案内役がカウスだった。

番組終了後の13年10月、「劇場に行ってみたいという人は多い。来られないならこっちから出向こう」と、相方のボタンとともに、中堅・ベテランの漫才師を率いて全国ツアーを始めた。ボタンが体調不良で休養した19年以降はカウスが1人で主宰し、コロナ禍で休演した1年以外は、月1回程度続けてきた。

100回目に向けて、気合を入れる中田カウス

「毎回『次はあるかな』と不安に思いながらやってきた。もう100回やってんねやねぇ」と感慨深げに話すカウス。「芸人が出ていくと拍手が鳴りやまない。その拍手に負けない笑いをとらないといけないから、みんなびびりまくってます。それがかわいくてね」と笑う。

お願いしたわけではないが、出演する芸人は若手でも中堅でも常に新ネタを持ってくる。「お客さんは常に新しいものが見たいし、もう見たくないと思われたらやめなあかん。来年も来てほしいと思ってもらえるように、一回一回が全力投球なんです」。ツアーが10年間続いてきた秘訣だろう。

「僕がいなくなっても『漫才のDENDO』は生き続ける。今は僕が預かっているだけで、どこかでふさわしい人に渡す」。14年に上方漫才協会発足を呼びかけ、会長として後進育成に注力するカウスは、次世代を見据えている。

（吉田清均）

鬼才の軌跡 ―下―

井上道義引退

音楽を欲する生きている証拠

井上道義は大阪の四つのプロオーケストラや京都市交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団と、関西の様々なオケでタクトを振ってきた。来年の引退を前に、音楽界に言い残したいことを率直に語ってもらった。

▶大阪のプロオケへ　個性出す努力を

昔は、大阪にオケが一つしかありませんでした。（大阪フィルハーモニー交響楽団を創設した）朝比奈隆さんがあれほどまでに神格化されたのは、大フィル一つだったから。

僕にとってのショスタコーヒッチと同じで、朝比奈さんはブルックナーを極めようとした。楽団の多い東京だったら色んな雑音にかき消されたでしょう。彼の演奏は非常に個性的で、面白かった。ヨーロッパの教会の響きに近い交響曲の音が出てきたのには、皆、非常に驚きました。

大阪には今、プロオケが四つあるけど、なかなか個性が出ないよね。パイ（客）の取り合いになっている。大都市のニューヨークでさえ、良質のオケは二つか三つ。西洋音楽がもともと血肉にない日本で、たくさん作るのは無理が出てきます。

兵庫と違って、公立の本格的な音楽ホールが大阪市内にはない。これも問題です。

関西のオケそれぞれに応援団がいるようですけど、音楽は「応援」するものじゃありません。音楽は「芸術」だから。演奏そのものに価値がないといけない。

演奏が悪かったら、拍手をせずシーンとして帰る。楽団員も「良くない」と思った指揮者は、皆で話し合ってクビにすべきです。

病に倒れたのでよく分かるのですが、病気で激しい苦痛のある時は、音楽は必要ないんです。無理です。何の役にも立たない。役に立つのはある程度、健康な人。つまり、音楽を欲し、演奏できたり、聴いたりできる時って、あなたが生きている証拠なんですよ。

来年末の引退に向け、演奏会の予定は詰まっている。「やりたいことを、もう一回、全部やるって感じだね」＝上田尚紀撮影

▶観客へ　演奏悪ければ拍手せず帰って

振り返ってみると、僕にとって、海外の名門オケのポストを得るといったことは大事じゃなかった。人から称賛されたり、モテたりするのも、僕にはあまり価値がない。「自分でないと挑戦できないことをやり遂げたい」と、14歳の頃から思ってきました。今、その時になりたかった自分になれたような気がした。だから、引退を決めました。

引退後？　本当に何もしないです。引退が近づいたら何か思い浮かぶかなと思ったけど、今のところ本当に何も考えていません。

音楽界にはもう、十分、関わった。今後は関わりません。それでいいと思ってます。やりたいことは、全部、やりきったから。

（この連載は青木さやかが担当しました）

なつやすみ

プール掃除
卓にはそ
こし……。
（福音館書
ルそのまま
夏休みを
描いた絵
自身の
ら、小学

夏は、
びて、野
と育つ季
スやトマ
野菜や果
いしい絵
ューに載
姿形は
けれど足
さふさの
ニンジン、
くてたま
ょんすけ
手で捕ま
ュルニュ
る。投げ
ても、気
前に進む
ンジンジ
議な野菜
と腹ぺこ
ギたちの
な戦いを
出す。
リズム
ある文章
ユーモラ
ンジンジ
い存在感
いの激し
が好きに
い。
荒井真
実物大で
ほどの種
葉が伸び
の野菜が
く姿を細
熊田千佳
画の名手